



第二十回 新府城

～武田の滅亡と天正壬午の乱～

今回紹介するのは、甲斐の新府城。武田信玄の跡を継いだ武田勝頼が躑躅ヶ崎館から本拠を移すべく築城するも、その完成を見ないうちに武田の滅亡を迎えた城として知られています。悲劇的な印象の強い新府城ですが、本能寺の変後に起こった天正壬午の乱と呼ばれる旧武田領争奪戦で重要な役割を果たした城でもあるのです。

新府城の築城と武田の滅亡

武田勝頼が配下の真田昌幸に命じて新府城の築城を開始させたのは、天正九年。武田が織田・徳川連合軍によって滅ぼされることになる前年のことです。長篠の戦い（第3回長篠城参照）に敗れた後の武田の類勢は著しく、「人は城」などと言っていたのは今や昔、織田勢の本格侵攻に備えて要害堅固な城を築く必要があったのだと言われます。また、密かに織田方に通じ武田家臣団の離反を画策した穴山梅雪の謀略であるという説もあります。様々な理由はあったでしょうが、新たな主君としての指導力発揮に苦勞していた勝頼にとって、古い体制を刷新したい気持ちがあったのは確かなのではないのでしょうか。

甲斐の古府中（甲府）に対して、新府城と呼ばれたこの城が築かれた葦崎は、古府中～諏訪を結ぶ道と、北の佐久平へと通じる往還道との交差点にあたり、甲斐、信濃支配のななめともいえる場所でした。その上、この辺りは釜無川に沿って七里岩と呼ばれる断崖が長く続く地形になっており、新府城の背後は目も眩まんばかりの断崖絶壁となっています。そして、残る三方には真田昌幸の縄張りによる武田流築城術の粋を尽くした防御構造をめぐらせており、勝頼がとりあえず入城した後も工事が継続していれば、難攻不落の壮大な城郭が完成するはず

だったと思われます。しかし、この大規模普請が却って家臣の反発を招き、離反を誘発してしまいました。そして、織田・徳川連合軍の大侵攻を前にして、諏訪の上原城まで後詰めに出ていた勝頼は新府城へ撤退。城を焼いて落ち延びるも、重臣の裏切りに遭って自刃し、ここに武田家は滅亡したのでした（第14回高遠城参照）。

本能寺の変と天正壬午の乱

武田家を滅亡させた織田信長は、旧武田領に配下の滝川一益、川尻秀隆、森長可らを配置します。長年にわたり強豪武田の圧迫に耐え続け、信長にとって防波堤の役割を果たしてきた同盟者徳川家康が得たのは駿河一国のみでした。それでも、家康は文句も言わず、加領のお礼に安土城へ赴きますが、本能寺の変が起こったのは、その後、堺見物に出かけていた時のことでした。伊賀の山中を越え（第6回伊賀上野城参照）、命からがら領国へ戻った家康は、すぐさま信長の敵討ちのために尾張まで出陣しました。ただ、周知のとおり、羽柴秀吉が予想以上の早さで駆け戻り、明智光秀を討ち果たしてしまいました。浜松城へ帰還した家康は、以後、甲斐、信濃方面の経略に注力することになります。というのも、甲斐では、川尻秀隆が一揆の国人衆に討ち取られ、北信濃では、それまで三方から織田勢に追い込まれていた上杉景勝が逆襲に転じ、森長可が逃亡して空になった川中島へと進出。更に、それまでなりを潜めていた北条氏直が上野（群馬県）へ5万余の大兵をもって出陣。滝川一益率いる織田勢1万8千を神流川の戦いで潰走させると、その余勢を駆って碓氷峠を越え、信濃・佐久へと乱入してきたのです。

それまでに、家康は、密かに保護していた武田旧臣の



北条勢と徳川勢の動き

依田信蕃を旧武田領へ派遣して遺臣を糾合させるなど、織田の武将が逃亡して領主不在となった甲斐、信濃に徳川方の勢力を植えつけていました。ところが、4万3千という圧倒的兵力をもって碓氷峠を越えてきた北条勢を前に、上杉に寄っていた真田昌幸や、織田に降っていた木曾義昌など、信濃の諸将が北条方に付きます。そうした情勢に勢いを得て、北条氏直は真田領を通過し、上杉景勝が帯陣する川中島へ進出しました。そして、半月ほどにらみ合いますが、上杉とは川中島を譲ることで和議を結び、狙いを徳川に絞ります。小諸城へ戻った北条勢は諏訪方面へと南下。北条へ寝返った諏訪頼忠を攻めていた3千の徳川勢は予想外の大軍に遭遇し、新府城へ撤退しました。しかし、ここで家康は強気にも古府中を出て新府城に進出します。この時、新府城に入ったのは8千程度でしたが、譜代家臣を中心とした精強な主力部隊であり、要害堅固な新府城に陣取られては、地形的に、これを無視して甲府盆地へ進軍するのも危険です。北条氏直は新府城北方の若神子城に陣を置き、徳川家康と対陣することとなったのです。

そこで、北条方は無理攻めをせず、徳川主力を新府城に釘付けにする一方で、優勢な兵力を活かして秩父や郡内方面からも兵を進め、外側から徳川勢を包囲する作戦に出ます。そして、御坂城から1万の大軍を進発させ、背後から古府中を突こうとしたのです。ところが、古府中の留守をあずかっていた鳥居元忠らがわずか2千足らずの手勢をもって急行。黒駒の地で、分散して略奪に及んでいた北条

勢に襲いかかり、散々に破って敗走させました。この戦いの結果は戦局に予想以上の影響を与えることになります。一旦は北条に従った旧武田領の諸将に、「小勢といえども、長年我らと互角に戦ってきた徳川勢はやはり強い」との印象を新たにさせる結果となり、家康の誘いに応じる者が増えていったのです。中でも決定的だったのが、碓氷峠からの補給線上に勢力を持つ真田昌幸の寝返りでした。こうなると、4万余という大兵力がかえって仇になります。もともと北条は関東の覇者を目指しており、甲斐、信濃への侵攻は上野の織田勢を追ったついでのようなところがありました。北条氏直は、上野は北条、信濃は徳川という約束で和議を結ぶと、本国へ撤退していきました。

信濃から北条の影響力を追い払ったことにより、徳川家康は、旧武田の領土及び強力な家臣団をほぼまるまる手に入れることになりました。こうした実力を背景として、この後、後顧の憂い無く秀吉に対抗し、小牧・長久手の戦いで己の実力を見せつけた上で、豊臣政権の筆頭大老としての地位を確立していくことになるのです。もし、このとき北条に旧武田領を併呑されていたら、歴史は大きく変わっていたことでしょう。ただ、信濃と上野にまたがる所領を有していた真田については、北条との約束と矛盾を生じ、後々の騒動へとつながっていきます(第15回上田城、第17回名胡桃城参照)。

現在の新府城址

その後は廃城となってしまった新府城ですが、濠や土塁などの遺構は比較的よく残っており、「丸馬出」と「三日月壕」、また鉄砲を意識したと思われる「出構え」など、武田流と呼ばれる土の城の築城術の一端を見ることができます。八ヶ岳、蓼科などへお出かけの折には、ちょっと手前で高速を降りて立ち寄ってみてはいかがでしょうか。



二の丸土塁の遺構(この向こうが七里岩の断崖)